

当院入院透析患者における胃瘻の現状

医療法人衆和会 長崎腎病院

○森山 麗 中島智子 青柳真生 下田美智子 山中真樹子 丸山祐子
原田孝司 船越 哲

【背景】

在宅困難な入院血液透析患者が経口摂取困難に陥った場合、より安全に管理可能な胃瘻の導入については十分に検討すべきと思われる。

【目的】

当院入院患者における胃瘻患者の現状を分析し、適応が妥当であったか検証する。

【対象と方法】

胃瘻患者について、自己決定の状況や ADL について調査した。

【結果】

2005 年～2010 年に当院へ入院していた経口摂取低下患者 189 名のうち、胃瘻は 26 名 (13.76%)・同時期に中心静脈栄養 (IVH) は 136 名 (71.96%) に施行されていた。これらの開始に当たり、胃瘻で 23.08%、経管栄養全体で 15.09%・IVH で 14.71%と、患者意思確認は同等であった。一方、導入後の平均生存期間は胃瘻で 311.26 日であり、IVH の 133.71 日に比べて有意な延長が認められた。

【考察】

胃瘻患者において IVH 患者より有意に長い生存期間を認め、導入時の自己決定率に差はなかった。栄養や水分を与えることは、他の医療と異なり人間の基本的なケアである、という主張もあり、倫理委員会などを含めた慎重な検討が必要と思われた。